



豊かなハーモニーを目指して

表紙から

今月の表紙は、女声コーラスグループの「コーラス フェルマータ（代表 大園範子さん）」です。毎週火曜日、主に東区民センターで活動しています。

「フェルマータ」は、一九八四（昭和五十九）年に東区民センターで行われた講座を受講した方々を中心とした十六人で結成しました。「講座の修了で終わってしまうのもつたいない。ずっと歌い続けたい」と考えたのが始まりだそうです。グループ名は、そんな願いを込めて音符などを長く持続する音楽記号のフェルマータとしました。その名の通り約二十年も活動は続いており、現在は四十三人が参加しています。

グループのメンバーは「音楽の良さを知り、豊かなハーモニーを目指すとともに、みんなが連携と親ほくを深めること」。引越など理由で毎年メンバーの入れ替わりが多いようですが、す

ぐにうち解けて練習はいつも和気あいあいと進むそうです。歌に取り組む姿勢は皆さん真剣そのもの。最初に基礎の発声練習をしっかりと

してから、ソプラノやアルトなど各パートの練習に進み、いつも練習の二時間はあつという間に過ぎるそうです。「最初はうまくいかなかったも、練習を続けていくうちにハーモニーが生まれるときには、それまでの苦労も忘れるくらい幸せになれるんです」とメンバーの皆さんは笑顔で話します。

「フェルマータ」は、札幌市民芸術祭「市民合唱祭」と東区民文化祭に毎年参加して、練習の成果を発表しています。昨年は、長年の努力の甲斐あって「札幌市民芸術祭奨励賞」を受賞しました。また、昨年七月にはグループ活動が長年続いてきたことを記念して、単独のコンサートを札幌サンプラザで開催しました。当日、会場は満員になり、皆さん楽しく歌うことができ大成功だったそうです。

代表の大園さんは「これからも腹筋を鍛え、おなかの底から声を出して、みんなで明るくコーラスを楽しみたいですね」と話します。これからも、心を一つにして豊かなハーモニーを目指していきます。

ひがすといー

酪農業の成立

一八九六（明治二十九）年ころ、宇都宮仙太郎を中心として搾乳業者が集まり、ビールかすなどの飼料を共同購入するため、札幌牛乳搾取業組合を発足させました。

明治の終わりころから、札幌と近郊で練乳を製造する会社が設立されます。一九一四（大正三）年には苗穂にも北海道煉乳株式会社設立されました。同社の取締役には宇都宮が就任しています。佐藤金蔵も二十株（一株二十五円）分を出資しました。また、古谷製菓の創業者である、古谷辰四郎も同社の取締役に就任しています。

練乳会社は、搾乳業者ばかりでなく乳牛を飼育する農家にも原料乳の供給を求めました。そのため、農家も酪農業の担い手として成長し始めます。練乳会社の設立によって、牛乳の生産・加工から乳製品の製造・販売にまで及ぶ酪農業が成立しました。

牛乳生産者の組織化が進む

一九一五（大正四）年、札幌牛乳搾取業組合を母体として、札幌

第24回

村は家畜とともに
牛と歩む日々(三)

牛乳販売組合が設立されます。この組合は、牛乳の市販に加えて、練乳会社に原料乳を供給しました。二年後、組織を拡大して、札幌酪農組合に名称を改めます。

第一次世界大戦が終結した一九一九（大正八）年以後、日本経済は不況に見舞われ、酪農業も苦境に立たされます。そこで、農家は酪農経営を守ろうと組織化を進めます。戦争終結の翌年、札幌酪農組合は改組して札幌酪農信用販売購買生産組合になりました。このとき佐藤も理事に就任しています。

大正時代は、雁来村で酪農業が盛んになってきた時代でもありません。農家の中には、酪農を専業とする人たちも増えてきました。



雁来村のサイロと牛舎(大正末ころ)

一九二五（大正十四）年、佐藤は周辺の農家で初めてサイロを建てました。直径五・七メートル、高さ九メートルのサイロです。朝には牛舎から約四キロ北にある放牧地まで牛を連れて行き、夕方になると牛舎まで戻したそうです。